訳者あとがき

本書はPaul B. Preciado, *Je suis un monstre qui vous parle : Rapport pour une académie de psychanalystes*, Éditions Grasset & Fasquelle, 2020の全訳である。プレシアドの邦訳としては『カウンターセックス宣言（*Countersexual Manifesto*）』（拙訳、法政大学出版局、二〇二二年）に続いて、二冊目になる。

本書の元になったのは、二〇一九年に〈フロイトの大義〉学派が開催した「精神分析における女性たち」をテーマとした国際大会での発表原稿であるが、プレシアド自身が冒頭で述べているように、講演は発表内容が引き起こした「激震」により中断され、「準備した原稿の四分の一しか読むことができなかった」。プレシアドの講演は、一読してわかるように、精神分析業界に「喧嘩を売った」内容であり、会場の混乱と講演の中断も

©HUP

「宜(むべ)なるかな」である。むしろ、三五〇〇人もの精神分析家たちを前にして、よくこれほどの挑発的なパフォーマンスを敢行できたものだと、著者の「勇気」に感心してしまう。

訳者として感想を一言だけ述べておけば、プレシアドの議論は、意識的で戦略的なものとはいえ、フロイトやラカンの精神分析理論をかなり単純化しているきらいは否めない。精神分析理論を家父長制的－植民地主義的－性二元論(バイナリー)的だとする批判はもっともであるが、たとえばフロイト自身がフリースとの関係において同性愛的であったのではないか、さらにはフロイトの精神分析理論がフロイト自身が抱えていたかもしれない同性愛的嗜好との捻じれた緊張関係のなかで作り出されたのではないか、そしてそのこと自体がフロイトの精神分析の対象にさえなるのではないか（フロイトの精神分析理論自体によってフロイト自身を精神分析する可能性）、こうした観点を考えてみることも可能だろう。またフロイトの理論以外でも、メラニー・クラインによる精神分析の「女性化」がはらむ多様な「ブレ」――そのように女性化すること自体がバイナリーを反復してしまうという問題や、父子関係を特権化するのであれ母子関係を特権化するのであれ、とにかく「親子関係」にもとづいて個（＝子）の心的メカニズムを分析してしまうことの問題――に触れないのも、もったいない。そのようにプレシアド自身が、精神分析の抱え

る「コンプレックス」を捨象し、純化・昇華させてしまっている点は、ある意味では「脱構築」的な所作から遠ざかっている面もあるだろう。

とはいえ、精神分析理論が、狭く言えば、近代ヨーロッパのローカルな歴史の時空的制約の下で成立したにすぎない近代的個人の主体像——男性的、白人的、大人的、資本家的、国民国家的、異性愛的、帝国主義・植民地主義的、健康志向的・衛生学的・優生学的な（またプレシアドはあまり言及しないが、ユダヤ＝キリスト教的な）、一言で言えば、主権的な主体像——を、そしてこの像にもとづく抑圧を、あたかも人類に普遍的に妥当する本質であるかのように、「人間」なるものの心的装置として一般化してしまった点に対するプレシアドの批判にはまったく同感である（この問題について訳者は昔から疑問に思っており、ことあるごとにこの点を精神分析の研究者たちに質問してきたのだが、京都大学の立木康介氏や東京大学の原和之氏を除いて、きちんと答えてもらった記憶がない）。インターセクシュアルやトランスセクシュアルが以前よりも社会的に顕在化してきている現在（さらには無セクシュアルなあり方までもが話題にのぼっている現在）、異性愛的－家父長制的前提が強いオイディプス・コンプレックスに立脚した伝統的・規範的な精神分析理論は、大きな見直し、刷新を求められることになるだろう。プレシアドは精神分析

を悪魔とみなし（魔女狩りや赤狩りのように）弾劾裁判をしかけているのではなく、みずからの理論の可能性と限界、その歴史的な制約や条件を引き受けることを要求しているのであり、精神分析の「再生」を呼びかけているのである。プレシアドの「呼びかけ」が「過激」であることは確かだが（しかしまた、それゆえに刺激的であり、問題提起の力に満ちている）、精神分析の側からの真摯で生産的な応答を期待したい。

翻訳に際して、精神分析関連の用語について、早稲田大学大学院文学研究科博士課程の片岡一竹氏のご教示を仰いだ（とくに本書冒頭の「パス」の訳注については片岡氏の提案をほぼ踏襲させてもらった）。新進気鋭の若手精神分析研究者である同氏に感謝する。ただし、訳文のすべてに目を通してもらったわけでもないし、最終的に訳文を決定するのは訳者の「決断」であるので、精神分析関係の訳語に関しても責任はすべて訳者にある。

また本書の編集作業について、『カウンターセックス宣言』に引き続き、法政大学出版局の郷間雅俊氏のお世話になった。氏の的確な導きによって、きわめて短期間に翻訳を完成させることができた。ここに感謝の念を記したい。

二〇二二年一〇月一〇日

精神分析のポテンシャルを信じて

藤本一勇

©HUP